

奈良文化財研究所編

## 『仁和寺史料 古文書編 一』

吉川弘文館 二〇一三・六刊

A5 二三三四頁 一二〇〇〇円

本書は、仁和寺（真言宗御室派総本山）が所蔵する史料のうち、御経蔵第一五〇函の古文書の一部（二六六点）を収録したものである。文書の年代は院政期から室町後期に至る。解題によると、当函の古文書は元々法服用に使われていた唐櫃に収められていたもので、文化年間以降に文書函として転用されたという。奈良文化財研究所による調査の過程で編年順に整理され、一点ごとに通し番号が付された。現状は未成巻で、まとまりごとに包紙で一括されている。

宇多上皇が出家し法皇として住持した仁和寺は、やがて歴代住持に皇族が入ったことから御室とも呼ばれ、とりわけ中世において聖俗に宗教的権威を誇った大刹として知られる。その一方、経済基盤をはじめ、中世寺院としての仁和寺の実態については不明な部分が少なくない。その理由の一つに史料状況の問題がある。古文書に限らず仁和寺には典籍・聖教類も数多く所蔵されているが、その全貌は未だ明らかではない。各研究機関・団体による調査が断続的に行われており、本書も奈良文化財研究所の長年におたる調査成果の一部である。仁和寺所蔵の古文書については、これまで『平安遺文』や自治体史等により部分的に翻刻されては

たが、まとまった形で公刊されるのは初めてと言ってよい。今回収録分の古文書には、室町期の未翻刻文書が多数含まれ、『鎌倉遺文』未収録のものも少なくない。本書の刊行は、寺院史のみならず中世研究全体に裨益するところが大きい。

さて、本書に収録された古文書の特徴を一言で言えば、寺領荘園文書となる。その所在地は畿内七道の約三十ヶ国におよび、大荘園領主としての仁和寺の姿が浮き彫りとなっている。もともと、荘園関係の古文書は当函以外に『爰』函等にも散在しており、寺領の数はさらに増える。また、越中国石黒荘や周防国秋穂二嶋荘など、一つの荘園について時代を通じて文書が存在することも特色の一つであり、荘園制を考える上でも良質な素材となっている。この他、春屋妙葩書状（一〇八号）や未検出の將軍家祈願寺に関する文書（一五二号）など、興味深い文書が数多く収録されている。本書は幅広い関心から検討されるべき史料集と言えよう。

御経蔵第一五〇函には、なお室町後期中世文書が多数存在しており、続刊が待たれるところである。ちなみに、本書の刊行に合わせ、長く入手が困難であった『仁和寺史料 寺誌編 一・二』がオンデマンド版で復刊された。今後も研究の基盤となる史料の公刊が続くことを期待したい。

（大田壮一郎）